

# ドラマ映画を通じてイスラエルを論じること

三宅良美

## Discussing Israel through Drama Movies

Yoshimi MIYAKE

### イントロダクション

映画は政治，社会，経済の状況の代弁者である。とりわけ，混乱のなかで独立した小国イスラエルにおいて，映画は，それがコメディ映画であろうと，ドラマ映画であろうと，政治性を持つ。映画に使われる言語は何か，そのアクセントは，登場人物の衣装は？主人公の顔立ちは？どの地域が舞台となっているのか？これらの問いは，映画の政治性を如実に語っている。Hakak 2002によれば，イスラエル映画は，時代，とりわけ戦争によってカテゴリー化されており，映画はいずれの時代も政治性を強くもっている。

独立以前のイスラエルの映画は，シオニズム・プロパガンダ映画であり，パレスチナの明るい未来にむけて懸命に働く青年たちを描いていた。また，男女とも18歳以上は徴兵されるという現実を反映して，国を守る意識を高揚しようと，軍隊の努力，また，友情，そして，戦争での大勝利を誇る映画が主流だった。

しかし，ヨム・キプール戦争（第4次中東戦争）をへて，その，「強いイスラエル」神話は崩れる。同時に，戦争で心身が傷つき，家族や友人を亡くす，悲しみに打ちひしがれたイスラエル人を真っ向から描く作品がでてくるようになった。イスラエル映画は勝利を描くものではなく，そこでの悲惨な状況，残酷さ，そして，戦争が残した傷跡を描くものと変わっていった（Hakak 2002）。

2006年の10 - 11月，「ドラマ映画に見るイスラエル・パレスチナ」と名うって5回の公開講座を行った。日本に住む人たちの，イスラエルという国についてのイメージは，「テロ，戦争の怖い国」だ。事実日本で流されるニュースといえばそれしかない。一方では，「世界きっての悪玉の国」でもある。もともと住んでいたパレスチナ人を攻撃し，排斥した国。そうでなければ，まったく異なった視点からみれば，キリスト生誕の地，キリスト発祥の地，だから，聖なる国でもある。

同時に，イスラエルは，キブツという，共産主義に基

づく理想社会を実現している新しい国，迫害を受けてきたユダヤ人が，ホロコーストを経てついに独立した血と涙の結晶の地，でもある。このような，あまりにも多様な，かつ相容れることのないような側面を同時に持つイスラエルを，どこまで現実に近いところで提示しえるか，というのがテーマであった。

公開講座の登録者は13人であったが，実際ほとんど毎回来たのは10人弱ほどだった。その何人かは，クリスチャンであったので，聖書にかかわるテーマをもつ映画だったりすると，強い関心をみせてくれた。またパレスチナ問題に強く意識をもつ参加者もいた。イスラエルにかかわること自体がポリティカルなもの，思想的なもの，宗教的なもの，とみなされることから，この講座に参加することにもメッセージがあると理解されがちだが，一方で，中東に対する漠然とした関心で来てくれた参加者もいて，歴史のイントロダクションからお願いします，ということを中間地点で伺った。

本論のさらなる目的は，建国以前，以降を通じて，軽んじられながらも1990年以降には中心となってきたドラマ映画から，イスラエルとパレスチナとの関係，また，現代イスラエルの問題をどのように講義参加者に提示できるか，どの程度理解してもらえるか，考察することである。ところで，なぜ，あえてかつてあったようなプロパガンダ映画や現実の情報にあふれたドキュメンタリー映画ではなくてドラマ映画を通じてなのか，という背景には二つの理由がある：

ドラマにおいては，恋愛，結婚にかかわる会話や，日々の，なんともないような会話そのものが，イスラエルの問題を提起していると考えたからである。ドラマは，イスラエルの「サラダボール」性，モザイクのような状況，「ユダヤの国イスラエル」という無理のある状況を暗示していて，小国ながら，良くも悪くも世界の関心を浴びているこの国の政治的なメッセージを帯びるからである。

ここでは，とりわけ，思春期の恋愛や，結婚や家族に

まつわるドラマを扱う。年間わずか10本ほどのフィーチャー映画を作っているイスラエルであるが、DVDが市場に出回るようになってからの作品の回転はものすごく早い。

イスラエルには国際映画祭として、ハイファ映画祭、エルサレム映画祭、そしてイスラエル女性映画祭などがあるが、とりわけハイファ映画祭は、場所からしてもパレスチナ映画がイスラエルで上映される可能性がもっとも多い機会であり、政治的混乱をもたらしたりする。

### 1. イスラエル映画の政治性

ユダヤ人の国として建国されたイスラエルが存続するには、ナショナリズムを始めとした人工的な戦略が必要となる。ナショナリズムを構築化するためのさまざまな戦略のひとつにメディアがあり、その重要なものが映像である。しかしながら、一方で、映画というジャンルは、イスラエル国営テレビ番組や新聞などとは一線を画している。イスラエル映画の作者たちは反骨の精神を崩さない。もちろんそれに反してイスラエル右翼化の翼賛の仕事をする製作者や、危機感を募らせている信心深い人々を高揚しようとする製作者もあり、それがアメリカあたりの裕福、強力なユダヤ人団体の支持をうけてイスラエル国内で賞をとったりもする。

### 2. イスラエル・ドラマ映画

イスラエル映画史において、ドラマ映画は無視されがちであった。このような中、ドラマ映画は、それまでの、プレーカス映画<sup>ii</sup>と呼ばれるスファルディ系のコメディ、また、日本でも「グローイング・アップ」と呼ばれ

テーマ	タイトル	年	主題
民族の多様性 帰還問題	晩婚	2001	グルジア地方からの帰還家族の息子の結婚問題
	行って、なれ	2005	スーダンの難民キャンプから、エチオピア・ユダヤ人として帰還してきた少年の半生
	この世の果てで左折して	2004	インドからの帰還家族とモロッコからの帰還家族の目を通して見たイスラエル
宗教の多様性	カドーシュ	1999	超正統派ユダヤコミュニティの伝統、不妊の問題
	ハ・ウシュピツイン	2004	超正統派ユダヤコミュニティの伝統、不妊の問題
国境の問題 政治的問題	シリアの花嫁	2004	イスラエルとシリアとの国境で翻弄される花嫁
	恩恵の時	2001	ユダヤ急進派の青年のイスラム聖地爆破計画とそれを阻止しようとする親友との葛藤

て親しまれた青春コメディもの、*Eskimo Limon* ‘レモン・アイスキャンディー’の要素もふくめたまま、悲喜こもごもの人間模様を描いてきた。80年代になると、ドラマ映画は、アーティスティックなもの、人間模様を深刻にえがくものとして、また、いくつかの著名な文学を題材にしてつくられるようになり、イスラエル・アカデミー賞をはじめとした映画賞に名を連ねるようになってきた。ここでは公開講座で紹介した映画のうち、次のテーマを提示することとし、その教材として下記の作品を扱った。

### 3. Synopsis

#### 3.1. Chatna meucheret 晩婚 Dover Kosashvili ドベール・コサシュヴィリ 2001年

「晩婚」というタイトルであるが、主人公のZaza ザザは30歳の、テル・アビブ大学大学院で哲学を専攻する一見プレイボーイ風の男 - この男の結婚にまつわる話。映画は、彼が両親に連れられて見合いに行くシーンで始まる。ここで重要なのは、グルジア地方からやってきた家族の一人息子ということで親の期待を一身に浴びていながら、ザザはモロッコ系の離婚歴あり、娘ひとりあり、という4歳年上の女性に首っ丈なのである。ザザは親のクレジットカードで彼女のために食品を買い届け、叔母からもらったオープンを貢ぐ。しかし、ひよんなことから親にばれてしまうと、ザザはそそくさと親のいうなりになり、母親の胸元で一度号泣した後、両親がアレンジしたグルジア地方の女と結婚する。ここでは、グルジア地方のあまりにも時代錯誤的な部分がつきからつきへと強調され、息子の抵抗程度では屈しない『伝統』と、それを失笑する監督の姿勢[監督自身がグルジア人。ザザの母親役は、監督の実の母親が演じている。]が現れて、ブラック・ユーモアのような。実は結婚に向けて親の言いなりになるこういったケースは、イスラエルの移民家族のありかたをある程度表していて、聴衆の多くは、同様の経験を少なからずともするせいから、ずいぶん話題になった映画で、この問題に真っ向から立ち向かった監督のチャンレンジ精神が批評家たちに絶賛され、イスラエル・アカデミー賞を獲得している。

#### 3.2. Tchiha vet hiha 行って、なれ Rado Michaelyanu ラド・ミカエルヤヌ 2005年

スーダンの難民キャンプにいた少年が、1985年に始まったイスラエルのモーシェ作戦によって帰還するエチオピア・ユダヤ人女性の息子になりすまし、イスラエルに向かい、ユダヤ名シュロモと名付けられ、イスラエル化されていく。その母親になりすました女性もほどなくして病死すると、シュロモはテル・アビブ近郊のリベラ

ルな家族に引き取られて愛情を浴びつつ成長していくのだが、本来はユダヤ人ではないことによる疎外感、黒人であることの差別に悩まされながら、難民キャンプに残した母親への慕情を募らせ成長していく。タイトルの、「行って、なれ」、というのは、母親が、この少年を、生きていかせるために、むりやりユダヤ人の女性に追いやったときに息子に言った言葉である。イスラエルの、エチオピア・ユダヤ帰還政策、および、非ユダヤ・エチオピア人排斥政策など、実際に起こった事件とパラレルに進むこの映画は、セミ・ドキュメンタリーであるかのような印象をもたせるが、エチオピア・ユダヤ人の曖昧性（樋口2005）、また、非ユダヤ人が露呈することへの恐怖感など、シュロモが経験するひとつひとつのことが、何千人ものエチオピア人を表象している。ただ、シュロモにずっとついてまわった憂鬱とわだかまりが、再びスーダン難民キャンプに医師として戻り、子供の頃別れた母親と再会することにより、あつという間に解決されてしまう。話ができすぎなのではないか、と思うこともあるが、沈黙してきたエチオピア人に光をあてて、シュロモという人物を通してその問題を主体として語らせていることにおいてこの映画は画期的である。

### 3.3 . Sof haolam shemeala この世の果てで左折して。

Avi Neshet **アヴィ・ネシェル**2004年

フランスからやってきたモロッコ系ユダヤ人、インドからやってきたユダヤ人家族が、ネゲブ砂漠の真っ只中にある移民町で隣人同士となる。かたやフランス文化、かたや英国文化を背負い、自負する両家は、お互いにとまどい、蔑みあうかのようだ。しかし、それぞれの娘たちは、親同士の確執にもかかわらず、おたがいに友情を育みあう。約束の地であったはずのイスラエルへの帰還後の失意と諦め、それに対して、屈託ない少女たちとのコントラストは興味深い。ストーリーは、インドからの帰還家族の娘、サラにより語られる。

### 3.4 . Kadosh カドーシュ Amos Gitai **アモス・ギタイ** 1999年

エルサレムに位置するメアシャリムという、ウルトラ・オーソドックス・ユダヤ人のコミュニティにすむ二人の姉妹とその夫たちについての悲劇。メイルはリフカと10年結婚しているが子供に恵まれない。Talmud タルムード（ユダヤ律法）によれば、子供を産まない女は死んだも同然である。そして、ラビは、リフカと夫メイルを離婚させ、[子供をもつ]ことを目的として、より若い女を妻として娶らせる。

一方、リフカの妹マルカは、ヨセフと結婚させられるが、彼女はかつてから思いをよせるヤコヴがいた。ヤコ

ヴはしかしオーソドックスの教えに疑問を持ち、メアシャリムを出て俗世界に入っていた。決められた結婚でしかも一人の人間としての存在を認められないことを悲観したマルカはまもなくしてヤコヴと密会、その後帰りを待っていた夫にひどい暴力を振るわれる。愛し合っているにもかかわらず子供がいないことで離婚させられる姉、そして愛する人と結ばれず、夫に暴力を振るわれ蕭然とする妹。出口のない絶望的な状況の下、静かに慰めあう姉妹。そこにのしかかる宗教法とときたりに真っ向からたちむかった作品である（Dupont 1999）。

夫が朝の祈りで言うことは、「神よ、私が女として生まれなかったことに感謝します。」（Breton 1999）

リフカが勇気をもって産婦人科の医師に診察にいったときに医師が言ったこと：それは、夫婦の間に子供がうまれないこと理由はリフカ側にはないこと、だから、夫が診察をうけなければならないこと、だったが、ウルトラ・オーソドックスの教えでは、子供に恵まれないこと＝女側の問題であり、夫が医師に検査をしてもらうことは不可能だった（Guilloux 1999）。

ラビにより、若い女と結婚させられるとは言え、メイルは長年の妻リフカだけを愛している。リフカも同じである。リフカは、ある晩、メイルのもとに忍び、彼への変わらぬ愛を明かすのであるが、翌朝、彼女は息を引き取っている。子供を産まない女は、死んだも同然、神は最後まで許さない、というメッセージをこの映画は伝えていて、超正統派コミュニティーのもつ残酷さを強く訴えている。

### 3.5 . HaUshpizin ハ・ウシュピツイン（“スコット（仮庵の祭り）に現れる客” という意味）Gidi Dar **ギディ・ダル** 2004年

「カドーシュ」と同様、ウルトラ・オーソドックス・コミュニティーに住む夫婦の話。こちらも、10年以上寄り添っているのに子供に恵まれていない。しかし、ある年のスコットのお祭りが始まる直前、夫は、思わぬ祝い金を受け、運がついてきたことを悟る。ところが、スコットの祭りの日がやってくると、やくざまがいの客（夫の元友人）に見舞われ絶望的となる。だが、神は見捨てていない。信心深い夫婦には、その向こう側に幸せが待っていた、という、超正統派ユダヤ・ハッピーエンド物語。最後のシーンは、二人の望むように息子が生まれ、割礼の儀式で嬉しさを隠しきれない妻の笑顔で終わり、上の「カドーシュ」と完璧なコントラストを見せている。この映画制作者は、「カドーシュ」へのアンチ・テーゼとしてこの作品を作ったのではないかと考えられる。

「ハ・ウシュピツイン」の主人公が、実は chazara

letshuva「神への応えにもどった」人物一すなわち、かつては、登場する来客のような世俗者、それどころか、ならずものであったのが、神へ帰依したものであり、一方「カドーシュ」のヤコヴは、逆に、神に祈る者から俗世界に移った、chazara lesheela「神への問いに戻った」者であった。ヤコヴは、軍隊だったとき何度も神に祈ったが、なんの応えもえられずに終わったことをマルカに告白していた。このコントラストも、二つの映画が根底において対極にあることを示唆している。「ハ・ウシュピツイン」が、イスラエル・アカデミー賞を獲得し、劇場公開も長かったのに対し、「カドーシュ」のほうはイスラエル映画協会から排斥され、フランス・カンヌ映画祭実行委員会が出品作品として選考するまで、国内ではしばらく劇場公開されなかった、という事実も意味深い(Dupont 1999)。

### 3.6. HaHesder 恩恵の時 Josef Cedar ヨセフ・セダール 2001年

西岸部に住み軍隊に属するメナヘムは信心深く、二人の親友と共に、軍隊とシナゴークを往復している。シナゴークにはカリスマ的なラビがいて、信仰とイスラエルの軍事力の高揚をあおっており、右翼の急進派を引き込む危険性のある人物として、イスラエル軍幹部からは警戒されている。一方、メナヘムは、そのラビの娘ラヘルに思いを寄せているが、ラビのほうは、メナヘムの親友であるピニを娘のパートナーとして選び、メナヘムを落胆させる。ラビが決定したことは、神の決定であるから、それを打ち破る術はない。ところが、当のラヘルはピニにまったく気がなく、メナヘムになびく一方なのだ。

ラヘルに無視され、自暴自棄になったピニは、ムスリムの聖地であるアル・アクサ爆破を計画し、ダイナマイトをもって地下に閉じこもり、それを阻止しようとするメナヘムとクライマックスを迎える。

### 3.7. Hakala hasurit. シリアの花嫁 Eran Riklis エラン・リクリス 2004年

イスラエルが支配しているゴラン高原はレバノンとシリアにまたがり、そこには、Druze ドゥルーズ という、アラビア語を母国語とした民族がいる。ドゥルーズは、また、イスラムに近いといわれる秘儀的宗教をもちつつ、山岳地帯に住まい、同時にイスラエル国家に従うマイノリティーという点で両義的である。その娘、モナが、写真を一度見ただけの、シリアの有名なコメディアンに嫁ぐ。しかし、一度、シリアへ向かうと彼女は実家に戻れなくなる。イスラエルとシリアには国交がなく、シリアはイスラエルという国家の存在を認めていない。嫁いだ

ら最後、両親や兄弟、慣れ親しんだ近所の人たち、友人にも会えないのだ。不安におののきながらも実家で披露宴を行った後、モナは国境を越えようとするのだが、両国のパスポート・コントロールに翻弄され、文字通りその国境線で立ち往生する。ロシア人の女性と結婚したのために勘当された兄、シリア支持運動に関わって逮捕され、保釈されたばかりの父、保守的、父権的な夫との確執に悩まされる姉、という、モナを囲む人々の問題も意味深い。上記の、『行って、なれ』がエチオピア人の問題を描いたように、時代の過渡期にあるドゥルーズの問題を集約的に描写している。

## 4. 終わりに

本論では、イスラエル・パレスチナという国と、その諸問題を、ドラマ映画を通じて紹介するという目的で行った講義について考察した。映画を通じて、歴史、社会経済、政治的背景にふれ、イスラエル・パレスチナについての一辺倒のイメージを打破することが最初のゴールであった。しかも、映画は、ドキュメンタリーや、アーカイブではなく、あくまでも人々の日常を描いたドラマ映画を選んだ。これらの映画について論じることで次ぎのようなことが理解してもらえた。

1. イスラエル・パレスチナの政治社会の複雑性
2. 民族と宗教、言語の多様性
3. シオニズムのひずみ

一方で、著者の選んだ映画は、イスラエル全国民が関わる軍隊を舞台としたものはなかった。Kikar HaChalomot「デスベラード・スクエア」のような、現代映画論において必ず論じられてきた著名な作品もない。また、重要なドキュメンタリーである、西岸、ジェニンでのイスラエル軍による虐殺についてレポートした「ジェニン、ジェニン」、インティファダで次々に死んでいった子供たちを追っていった「アルナの子供たち」も、講義中は少しふれたが、中心的な資料ではなかった。これらのフィルムはほかの映画史の専門家により何度か紹介されている(とちぎ2000, 四方田2004, 2005a, 2006)からであるが、実際にはより時間をかけて紹介するべきものであった。

また、ドラマ映画という資料を使いながらも時間の制限から、ふれることのできなかった主題も多かった。イスラエルのドラマ映画が、監督や制作者の独白的、自伝的側面を強くもつこと、それが、多くは男である監督の青年時代とそのセクシュアリティに関わっていること、また、日常において、性という問題に人は真剣に関わっていることを自ずと主張していることなどを、ドラマ映画の特徴として論じたかったが、それも割愛せざるを得なかった。(「パラグラムがわかる」という意味)

どこでも映画のジャンルは多様である。講座において、どの映画を選ぶか、どの画面を見せるか、ストーリーのどの部分に焦点をあてるかで話題は大きく異なる。そういう意味で、紹介者の役割は膨大である。

コース終了後の、聴講者によるコメントでは、イスラエルの複雑さ、パレスチナとの問題などが泥沼のように奥深く、問題の難しさを感じたというものが多かった。「テロと戦争の国」という一面的なイメージだけではないことが、これらの映像を紹介することにより理解できた、と認識してよいのではないかと思う。

多くのイスラエル映画の制作資金はフランスやイタリア、オランダなどのヨーロッパ諸国からでている。エチオピア、パレスチナ、といったマイノリティーや政治的問題に真剣にとりくむにあたり、他国の予算が付くのは、もはや常識となっている。こうして、イスラエルの映画は、トランスナショナルであることにより国際的に生きながらえる。映画はますます多様さを極め、社会の問題を直視して止まない。

また、イスラエル文化省は良心的であり狡猾であり、偽善的であり、真の意味で国際的である。“世界を敵に回している”イスラエルに対して糾弾するものにたいし、内部から圧力をかけ排斥しようとする傍らで、彼らが国際的に活躍できることを熟知している。このような文化人たちをおおいにサポートし、イスラエルのリベラリズムを謳わせる。だから、Amos Gitai, Eyal Shivanのような、一時は排斥され国を追われた制作者たちが、ヨーロッパをはじめとした国際映画祭で賞をもらい凱旋することを、イスラエルは期待する。

このように、映画を通してある共同体を、文化を、政治経済状況を紹介することはますます盛んになる。劇場でしか見られなかったフィルムが、ビデオへ、そして、テレビで放映され続ける。DVDが主流となり、言葉の吹き替えと字幕の多様さゆえ、世界のかなりの部分で、映画に対する距離は極端に縮まっている。

## 参考文献

- Breton, Emile  
1999 "Au pays des hommes noirs", *L'Humanité*, 1st September 1999
- Dupont, Joan  
1999 "Director's Eye on a Hidden World of Jerusalem", *International Herald Tribune*, 15 May.
- Guilloux, Michel  
1999 "Amos Gitai filme l'amour de Dieu et la haine des femmes", *L'Humanité*, 1999-05-14
- Hakak, Lev  
2001 *Modern Hebrew literature made into films*. Lanham, Maryland: University Press of America.
- とちぎあきら  
2002 まだ見ぬ映画のために：日本におけるイスラエル映画。『アリエル』：128-132.
- 樋口義彦  
2005 「エチオピアの文化は近代的ではないから」～イスラエルのエチオピア受け入れ政策。『日本ユダヤ研究』：62 - 71 .
- 四方田犬彦  
2004 『心は転がる石のように』ランダムハウス講談社。  
2005a. 『見ることの塩』作品社。  
2005b. 「シオニズムと映画ーイスラエルのフィルム・アーカイヴを観る」。『Intercommunication No.51:33-51.』  
2006 『パレスチナ・ナウ』作品社。

<sup>i</sup> 私は、イスラエル国内に入ると同時にもっとも最近発売されたDVDを物色するが、わずか一ヶ月の間だけでも、すでに3本の新しいDVDがでていることが普通である。

<sup>ii</sup> ブレーカスとは、チーズ、マッシュルームなどを包んだパイ snack。中東のペーカリーで売られている。イスラエル人は、これをコーヒーやお茶と一緒によく食べる。イタリア製ウエスタン映画が Spaghetti Western とアメリカで呼ばれた（日本では、「マカロニ・ウエスタン」）ように、そこで日常食べる物で大衆映画を表すことはよくあるようだ。